

唄  
うた  
歌  
詩  
うた  
うた

◎特別寄稿

ダダと「言葉の刻印力」  
諏訪哲史

◎トークイベント

和合亮一トークライブ  
「“ことば”を通して  
福島と向き合う」

◎新収蔵資料紹介

「青い馬」  
「震災詩集 災禍の上に」

◎常設テーマ展示

「中也の“うた”」

◎特別企画展示

「中原中也の手紙—安原喜弘との交友」



中原中也記念館  
館報2013

◎企画展示

企画展I「高橋新吉—ダダイズムと関東大震災」  
企画展II「中也の父・謙助」

◎記念館ニュース

中原中也記念館から手紙を出そう  
中原中也を読む会100回記念 映画「眠れ蜜」を観る  
「文学散歩～中也・鷗外ふるさと巡り」バスツアー

主なできごと（平成24年度 行事記録）  
第18回中原中也賞受賞作品  
平成25年度 行事予定

18

Public relations magazine  
第18号

Chuya Nakahara Memorial Museum

ダダと

# 「言葉の刻印力」

text=Tetsushi SUWA  
諏訪哲史

あれからもう四年以上が経つのだ。

二〇〇八年の十月十二日に、僕は中原中也記念館のお誘いで、名古屋から山口の湯田温泉へ訪れ、講演をさせていただいた。

東海道・山陽新幹線から在来線を乗り継いで、昼前に、僕は湯田温泉駅へ降り立った。深まりつつある秋の好日、空は澄んで山は悠然と迫って見えた。行きは送迎の車に乗せていただいたが、講演後の帰り道は駅までの十数分の道を歩いてみたくなり、記念館の玄関で皆さまにお別れを申し上げた。歩き出すと、ほどなく高田公園（現井上公園）にさしかかり、子供らと挨拶しながら中也の詩碑を読んだ。駅の前に新設されたらしい広い車道の前で信号を待つ間さえも、空には風が鳴り、四方をとりまくすべての空気が音が、不可思議な茫漠とした感じを僕に与えた。本当に夢のような、束の間の日帰り講演旅行だった。

束の間の滞在だったはずの湯田温泉の風景が、なにゆえここまで強く僕のなかに印象づけられているのか。それははつきりした現実感というよりも、幻影のようなはかなさであり、中也が少年期を生きたこの桃源郷の時空なればこそ、一種異様ともいえる地霊の感応を、僕も受けたのではなかったか。

幼少から放浪に放浪を重ねた魂の詩人中也は、どこへ「去る」ために旅をしたのであろう。彼は実は、ひたすらに、「帰りつづけていた」のではないだろうか。彼の家路は、しかし、難儀な迂路となった。それ



が中也の生、帰路であるはずの、長くつらい旅路であった。

あの日、僕が行なった講演は、「ダダとポンパとゆやゆよん」という演題の、いささか妙ちきりんなものだった。僕という一介の現代作家が、中也という文学史上の天才的詩人に関して、なにごとかの弁を弄するには、唯一、「ダダ」という「言語の破壊的作用」を共通軸にして、狂言役者さながらに立ち回るしかなかった、というのが本当のところである。

十五歳の中也が京都において、高橋新吉のセンセーションナルな詩集『ダダイスト新吉の詩』を読んで衝撃を受けダダに傾倒したという史実自体はともかく、僕は中也の詩の本質、その中心に、他ならぬダダがあった、否、それどころか中也は、詩という文学もしくは、すべての文学なるものの本質のうちにはダダを見ていたのではないか、そう愚考するものである。たとえばそう、次の詩を見られたい。

名詞の扱ひに

ロゼックを忘れた象徴さ

俺の詩は

宣言と作品との関係は

有機的抽象と無機的具象との関係だ

物質名詞と印象との関係だ。

ダダ、つてんだよ

木馬、つてんだ

原始人のドモリ、でも好い

歴史は材料にはなるさ

だが問題にはならぬさ

此のダダイストには

古い作品の紹介者は

古代の棺はかういふ風だった、なんて

断り書きをする

棺の形が如何に変らうと

ダダイストが「棺」といへば

何時の時代でも「棺」として通る所に

ダダの永遠性がある

だがダダイストは、永遠性を望むが故

にダダ詩を書きはせぬ

「名詞の扱ひに」

詩とは意味である前に文字・音声であるのだから、中也の詩から内容や概念のみを抽出するのは本来、批評者の無粋な狼藉である。けれども、この引用の詩篇のなかで語られている事柄は、おそろしく深遠である。

この詩篇はすなわち、「ダダでないものは詩（文学）ではない」、そういった当時としては極めてモダンな文学観の、言葉少なな披歴である。僕にはそう読める。

自分の詩において名詞を扱う際、そこに論理や文法、一定のルールはない。中也は詩の冒頭でまずそう述べている。

次に、歴史は知の材料になりうるが、ダ

ダダイストにとつては何ほどの問題にもならない。これは「言語における意味の優位」という旧弊をこき下ろす中也独特の罵言である。

棺の形が時代とともに変遷しても、仮にそれがまるきり棺に見えぬ物象となり果て、死者を葬るための入れものという用途さえ失ったとしても、それを一人のダダイストが「棺」と指呼すれば、「それ」はたちどころに「棺」となる。しかも一度ダダイストに名づけられた「それ」は時間が経てば「それ」でなくなり、つまり「棺」でなくなる。ダダイストが、いつまでもそれを「棺」と呼ぶことを許さないからである。これらが、名称の永遠性の否定の意志である。

ダダイストとは、詩人とは、もつといえばあらゆる言語芸術の徒とは、ただひたすら世界を指呼する、さまざまに指呼しつづける者である。指呼された世界は、それによつて全体から切り取られ、物質的に限定され、気がつけば、彼によつて投げ与えられた言葉の下に、暫定的に、その物は顕れている。

わざわざ記号論を紐解かずとも、物は言葉の後に顕れる。よもやその逆ではなからう。はじめに言葉があった。しかるに、言葉を創造する畏れ多いあるじの玉座を、僭越にもダダイスト風情が乗つ取つたかのようない振る舞いである。が、ダダとは僭越をこそ宗とする破壊と越権の記号操作の営みであり、個々のダダイストらは俗世において、巷間において、市井において、全

能の言語創造主たらねばならないのだ。

ダダイストII詩人II言語芸術家にとつて、世界に既存する「母国語」こそが仇である。人類のコミュニケーションに資する有用言語とは、殲滅すべき対象である。けれども、それには彼らは、すべての発話者にとつて「外国語」であるところの「ダダ」(無意味語)を発明し、安穩とした「母国語」的日常言語を絶えずせせら嗤わねばならないのである。

田の中にテニスコートがありますか？  
春風です

よろこびやがれ凡俗！

名詞の換言で日が暮れよう

アスファルトの上は凡人がゆく

顔 顔

石版刷のポスターに

木履の音は這ひ込まう

「春の日の怒」

一行目・二行目・三行目のそれぞれ三つの文は、中也によつて周到に、相互の聯関を断ち切れられ、有機的・建設的な言葉の組織化を封じられている。そしてその詩の、ダダ的なもくろみも、四行目に、さも殷懃無礼といった態度で、わざわざ「自解」されている。その自解こそが、何よりもダダ的な「母国語」(日常言語)話者への痛烈な冷笑に他なるまい。

一見ダダとは思われぬ大人しい詩句も、中也の場合、多かれ少なかれダダ的な感性によって選ばれている。「母国語」にとつて破壊的なダダは、反面において、一度聴いたら耳から離れない流行り唄のフレーズのような、強い感染力を有している。

——トタンがセンベイ食べて

——ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

——千の天使が バスケットボールする。

——ホラホラ、これが僕の骨だ、

四例いずれも日常的な言語の使用を、ダダによって禁じられた詩句である。こうした無意味な「外国語」こそが、中也の詩の本質である。さらにいえば、すべての詩、否、すべての言語芸術の本質である。

僕が用いるこの「外国語」という概念、

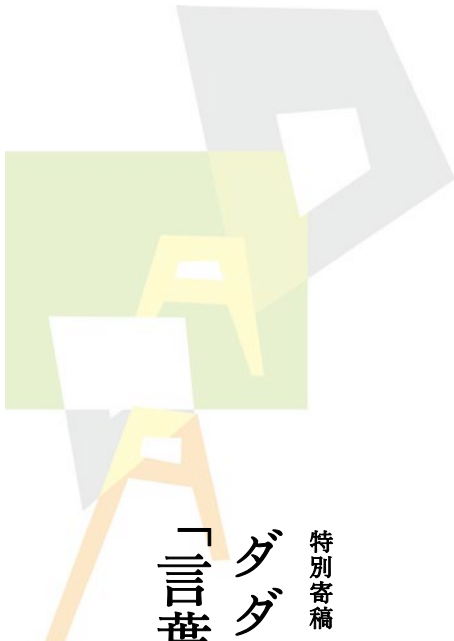
言い方は、実は、もともとフランスの思想家ジル・ドゥルーズの用語「マイナー文学」からもたらされたものである。ドゥルーズはプルーストの言葉を借りながらマイナー文学についてこう定義する。「作家は、(中略)言語の内部に新しい言語を、いわば一つの外国語⇨異語を発明する」(『批評と臨床』より)。一つの言語、日常的「母国語」の内部において、非日常的「外国語」を発明する営為、それがマイナー文学であり、ダダであり、詩、小説、言語芸術の本質である。

以上を総合すると、次のような極論が導

き出されよう。すなわち、中也のいくつかの詩はダダである、という文言は正確でなく、中也のすべての詩はダダであり、また、中也以外の詩人、それが本質的な詩人であるならば、彼の詩のことごとくがダダである、ダダでなければならぬ、と、いうものだ。

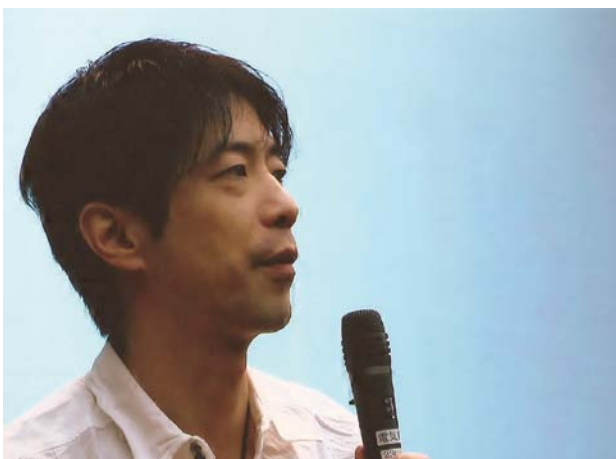
かつての僕の講演、それは本論のごく一面を紹介したものであった。あの日はダダの要素があるのか」という一文に早計に括弧してしまっておられるかもわからない。とすれば、僕の真意が「詩とは本質的にダダでなければならず、中也が本質的な詩人であるからには、彼はダダイストたるざるをえない」と、そう結論できる旨を、四年以上を経た今、改めて、ぜひ申し上げたいのである。

最後に、ぜひもう一度、僕を湯田温泉にお呼び下さり、講演なりなんなりをさせていただきますだけですよう、記念館の皆さまに切に、お願い申し上げます。



## 「言葉の刻印力」 ダダと

特別寄稿 — Special contribution 2013 —



### 諏訪 哲史 Tetsushi SUWA

昭和44年、愛知県名古屋市生まれ。國學院大学文学部哲学科卒業。愛知淑徳大学准教授。平成19年、『アサテの人』で第50回群像新人賞を受賞してデビュー。同作で第137回芥川賞を受賞。ほかの著書に『りすん』『ロンバルディア遠景』『領土』『スワ氏文集』がある。平成20年、当館主催の公開講演「中原中也のいごち」で講師を務めた。





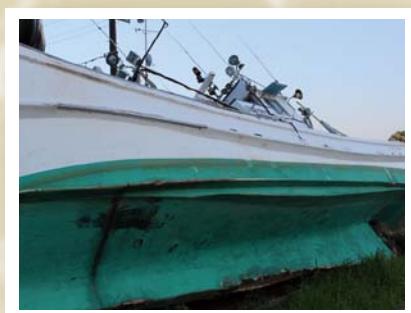
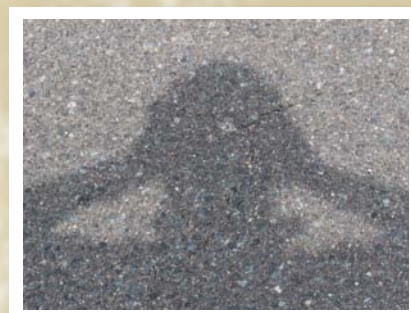
平成24年度 第2回公開講演

和合亮一トークライブ

# 「『ごことば』を通して 福島と向き合おう」

平成25年1月19日、山口市の山口情報芸術センターにおいて、詩人の和合亮一さんをお迎えして、トークライブ「『ごことば』を通して福島と向き合おう」を開催しました。その内容の一部をご紹介します。

(聞き手 中原豊)



## TALK LIVE in Yamaguchi 2012

このページの写真：和合亮一氏 撮影

—和合さんと山口とのつながりは14年前、和合さんの詩集『AFTEER』が第4回中原中也賞を受賞された時に始まります。その後、ワークショップや朗読のためにたびたび山口にお越しいただきましたし、和合さんも福島で中也の生誕100年祭などの文学にかかわるイベントを開催されて、山口と福島で文学を通じた交流が続けられてきました。2011年の3月12日にも、福島で「賢治・中也・心平、福島ニ交差点アリマス。」というイベントを開催するはずだったわけですが、前日に東日本大震災が発生し、このイベントは幻に終わってしまいました。

その後、和合さんはツイッターによる詩の発信を始められました。それが『詩の礫』をはじめとする詩集にまとめられて大きな反響を呼んだことは皆さんもよくご存知だと思います。『詩の礫』を書き始めたのは3月16日ですが、どのように過ごしておられたのですか？



3月14日に福島第一原発3号機が爆発しました。14日からあわてて避難を始めて、私の妻と息子も——1ヵ月後には戻って来るとは、避難をしまして、それで私一人になって、その時、とても孤独を感じたんです。孤独の本質というものを感ぜたんです。その時、本当の孤独を言葉にしたいと思いました。それは積極的なものではなくて、この孤独の本質を言葉に代えることで、何かにすがりつくような気持ちになりましたね。それまで自分は積極的な気持ちで詩を書き続けてきました。中原中也賞をいただいていたから、ずっと夢中で書き続けてきたんですけれども、その気持ちとは全く反対で、言葉にすがりついていないと、自分がこの世界に存在しているんだということが、実感としてわかないような気持ちになった時、目の前にあったのが逆に言う言葉だけだったという印象が今でも思い出されます。

—『詩の礫』の冒頭、4つめのツイート（つぶやき）が「行き着くところは涙しかありません。私は作品を修羅のように書きたいと思います。」、その次が「放射能が降っています。静かな夜です。」となっています。ツイッターというのは日付と時刻が記録されますが、この二つのツイートは同じ16日の午前4時30分の発信です。最初のツイートは明らかに宮沢賢治の詩「春と修羅」を踏まえていますし、次のツイートの「静かな夜です」という表現は中原中也の詩を踏

まえていたということですよ。この短い間に放たれたこの二つのツイートが、以後何度も繰り返されるモチーフになっていくんですが、この言葉が出て来た瞬間はどのような心境だったのでしょうか？

この話を中原中也の故郷である山口でお話しさせていただくのは、自分の中でも震えがくるんですけれども、中也のことを考えていました。3月11日から16日まで、言葉を失った状態でした。家に戻ってから中也の詩集をずーっと読みまして、中也がどんなふうに分かなくさしむと向き合って詩を書き続けたのかということにすごく考えたんです。そして、中原中也という詩人は感情の記録を書き続けたんだ、この詩集に書き綴られているものは中也の感情の記録なんだと思うようになりました。そうやって詩集を読んでいるうちに、「かなしみ」という言葉に触れると本当に涙が出てきたり、「愛するものが死んだ時には（春日狂想）」という一節があつて、その「愛する」っていう言葉に触れると涙が出てきたりしたんです。これは地震のショックで、心がある普通の状態ではないわけですね。その時に中也の詩集が、宮沢賢治の詩集が、僕の目の前にあつたんです。全く違う気持ちで違うまなざしで中也・賢治の詩集を読みふけたんですね。言葉にすがつたんですね。中也や賢治の詩にすがりつくようにして、余震にずっと震えていました。

詩を書いた時に、最初の「修羅のように

書きたいと思います。」というひと言が出てくるのですが、賢治の詩だと思つて書いていないですよ。自分の詩だと思つて書いているんですよ。誰が見ても賢治だということに思う。私の生徒なんかもこれ見て、「先生、賢治のパクつたの？」つて言われたんですけれども（笑）、だけど5分に1回の余震が来ている最中、「修羅のように書きたいと思います。」というこのひと言は、自分の中から出てきたと自分が思っているんです。「放射能が降っています。静かな夜です。」つていうのも本当に自然に「静かな夜です」という言葉が出たんです。これは目が真っ正面しか見えないという状況だったんですね。その時に「静かな夜です」というひと言が出てきて、それが後々になつてから、中原中也の作品のものがここに移つたんだ、ということに気付くんですね。

3月14日に3号機が爆発して、その日の夜に雨が降つたんです。雨が降っている中で、これからどうするか——特に息子のことでですね——ここに残るか、それともどこかへ避難するか、妻と話をしたんですが、長く話しても解決が付きませんでした。その時に、ラジオをつけました。当時のラジオは震災を伝える番組がずーっと流れているんですが、チャンネルをあわせたら、ピアノの曲が流れたんですよ。それで、妻が別の部屋に行った後も、一人で美しい曲に耳を傾けていたんですね。人間はどんな極限状況におかれても、このピアノの音色に





## 冬の夜 (抜粋)

中原中也

みなさん今夜は静かです  
葉籬（はかぢ）の音がしてゐます  
僕は女を想つてゐる  
僕には女がないのです

それで苦勞もないのです  
えもいはれない弾力に  
空気のやうな空想に  
女を描いてみてゐるのです

## 春

中原中也

春は土と草とに新しい汗をかゝせる。  
その汗を乾かさうと、雲雀（ひばり）は空に騰る。  
瓦屋根今朝不平がない、  
長い校舎から合唱は空にあがる。

あゝ、しづかだしづかだ。  
めぐり来た、これが今年の私の春だ。  
むかし私の胸搏（むね）つた希望は今日を、  
厳（ひが）めしい紺青（こんせい）となつて空から私に降りかゝる。

—もちろん中也の詩は直接そういう状況を歌つたものではありませんが、その表現が和合さんの中でよみがえつてきたというか、極限状況の中でその言葉に再会したというわけですね。

はい。中也が書いた「静か」という言葉には、どれだけの心の背景があつたのかなあ、と同時に思いました。

—中也の詩には、七五調とか「静かです」という話し言葉に近い口調などの、いわゆる「定型」があるんですけども、そういう形の上のものとは別の、もうちょっと深いところにある「心の定型」みたいなものが、和合さんの中のものとは一致したような、そんな感覚だつたんでしょうか？

そうですね。

—こうして言葉を失つた状態から改めて言葉を紡いでいった和合さんですが、『詩の磔』に続いて、『詩ノ黙礼』『詩の邂逅』と詩集を出しておられます。『詩ノ黙礼』では、実際に被災地に出掛けられているわけですね。

4月1日、ようやく福島にガソリンが戻つてきたんです。それでまっすぐ相馬松川浦に行きました。私が住んでいるところから大体1時間ぐらいの所です。どうしてそこに行ったのかというと、まずひとつは、

耳を傾けるんだ、ということに気がきました。その時、「みなさん今夜は静かです」（「冬の夜」という一節が浮かんだんですね。僕はそのピアノの曲を聴きながら、放射能の雨が降っているのに本当に「静かだなあ」と思ったんですね。もう一篇ありましたね、「あゝ、しづかだしづかだ」（「春」）っていう中也がつぶやいたその「しづか」っていう言葉が、3月14日の放射能の雨の中で、自分の中で響いてきたんですね。3月16日になって、たった一人になって、孤独のうちに打ちひしがれていた時に、自分の中で3月14日の夜の記憶が浮かんできた、と思つています。

えもいはれない弾力の  
澄み互（むた）つたる夜の沈黙（しじま）  
葉籬の音を聞きながら  
女を夢みてるのです  
かくて夜は更け夜は深まつて  
犬のみ覚めたる冬の夜は  
影と煙草と僕と犬  
えもいはれないカクテルです

そして私は呆気（ぼうき）でしまふ、バカになつてしまふ  
— 藪かげの、小川か銀か小波か？  
藪かげの小川か銀か小波か？  
大きい猫が頸ふりむけてぶきつちよに  
一つの鈴をころばしてゐる、  
一つの鈴を、ころばして見てゐる。

初任校が相馬農業高校で、20代の頃は浜通りに住んでいて、そのころ書いていたのが『AFTEER』という詩集です。南相馬の風景、相馬の風景を描いた詩集が『AFTEER』なんです。

それに、相馬港には父と二人でよく釣りに行っていました。「福島民報新聞」で松川浦が散々な様子、港の原形をとどめていないという写真が載って、父が泣きながらそれを私に見せたんですよ。私も泣いてしまいました、それでガソリンが手に入って、すぐ松川浦へ行こうということになったんです。母と妻からは反対されたんですが、やむにやまれぬ気持ちで行きました。私の教え子とか教え子のお母さんとか後輩とか友達とか知り合いが皆流されてしまったんですよ。だから、その現場に行きたいと思ったんです。



一和合さんはご自身も被災者でいらっしやるわけですが、『詩ノ黙礼』という詩集は、被災地に足を運び記録を取りながら綴られていった詩集です。「黙礼」という言葉が随所に出てきて、悼みの気持ちも表現されています。私がこの詩集に注目したのは、賢治の詩「生徒諸君に寄せる」の最初の一連「新たな詩人よ／嵐から雲から光から／新たな透明なエネルギーを得て／人と地球にとるべき形を暗示せよ」、これを繰り返し使われておられるところです。やはりこの詩句に引っぱられて、というところが大きかったのでしょうか？

そうですね。これが私の心の支えになったフレーズなんです。賢治の詩を読み返して、この一節に出会った時にですね、「嵐」「雲」「光」って何だろう、と自分の中で問い続けました。そして、これらの言葉を自分なりに追いかけてみようと思っただけです。

『詩ノ黙礼』は真っ白な装丁なんですけれども、相馬港に行った時、重たい空に雲がたちこめていました。そして海を眺めていまして、風が吹いてきて、風が吹いてくると亡くなった方のささやきとかつぶやきとか、ある私の友達などは泣き声に聞こえるとか、津波が押し寄せていた時の映像が浮かぶとか、海の浜辺に立つて風の音をきくと、想いがよみがえってくるんですよ。私が浜辺でそれを眺めて

いた時に、雲がたちこめていた中で、雲間を探している自分がいた。この海にはたくさんまだ見つからない命が、魂がここに眠っている。だけどやっぱり雲間に光を探している自分に気付いたんです。その時に、4月10日から5月10日まで、亡くなった方々——そこに私の知人や教え子も含まれますが——に捧げる詩を毎晩書こうと決めました。そして自分にとっての「雲」の意味をそこに探していこうと

思いました。『詩の磔』は表紙が赤いんですけど、これは3月16日から5月まで書きました。が、喧噪の中の地震と津波と放射能の恐怖に震えている中で書いた、自分にとつての「嵐」。そして白い表紙の『詩ノ黙礼』、これは自分にとつての「雲」だ、と思うようになってきたんですね。そして2冊をほぼ同時に書き続けていました。



『詩の磔』



『詩ノ黙礼』

—もう1冊『詩の邂逅』、これはインタビュー集でもあるわけですね。実際に被災された方々に話を聞いて、その前後に和合さんの詩が収録されている。他にも『ふるさとをあきらめない』というインタビュー集を出されたりして、対話から詩を生み出していらつしやいますが、これはやはり話の中から触発されてくるものが大きいのでしょうか？

『詩ノ黙礼』はとにかく1ヵ月毎日3時間から4時間書き続けたんですね。これは私なりの「行」——お坊さんがお経をあげる——自分にとってどんなことができるか、自分なりの「行」を見つめたんですね。そうして亡くなった方とずっと対話するように詩を書いてきました。その反対側に、生きている方々、生き残った方々。私がインタビューに行くと、「自分たちは生き残ったんだ。だから話をする。」と言って

くれる。これを僕は「光」と捉えた。生者との対話を、死者との対話の後にすることで、「嵐」「雲」「光」という自分にとっての宮沢賢治からの謎かけの答えを探していきたいと思った。探していくということは、自分では考えが狭い方向に行ってしまう。答えを求めるということが、だんだんと自分の中を見つめるということではなくて、今生きている同時代の生者である外側の方々に答えを探していくようになった。それが『詩の邂逅』『ふるさとをあきらめない』につながっていき

ました。  
—和合さんの言葉は震災後大きな変化とげました。書かれる詩も『AFTER』の頃と比べると平易な言葉を使用されています。震災を契機に和合さんの中で言葉の革命のようなものが起こったのでしょうか？

皆さんも多かれ少なかれあると思うのですが、震災を経験してそれまでの自分のありようが大きく崩れてしまった。きつい表現になりますが、それまで自分のやってきた詩というものが瓦礫になってしまった。それまでの自分の常識や考え方が音を立てて崩れていったんですね。全部ばらばらになってしまった時に、その自分の心の瓦礫というか、信じていたものの瓦礫というか、そういったものをひとつひとつ積みあげるように詩を書きたいと思いました。それで僕は中原中也の詩が、時には平易な言葉で書かれていて、みなさんに愛唱されているというのをすごく考えました。

この震災の意味を、今、福島にいる自分が自分なりに伝えていかなければ、福島は無くなってしまふ。その思いは今でも不安と怖れの中ではつきりとあります。福島は今、生き残りをかけなくてはいけないんじゃないかと思っているんです。福島県はアガタの「県」ではなくて、大気圏の「圏」、「福島圏」で、つまり放射能や震災の問題を抱えているエリア、原発から20km圏内はもう戻れないわけですよ。そのような中で、消えていってしまうんじゃないか、無くなってしまうんじゃないかという不安や怖れを今も抱えているんですね。だからそれをたくさんの人と分かち合うにはどうしても目の前のことをありのままに書くということに徹しなければ、記録として伝えていくと

いうことに徹しなければ。そこが僕の中で大きく変わったことなんです。

—和合さんはツイッターばかりではなく、朗読も精力的になさっています。声を通じて発信されているわけですが、声を持っている力についてどう思われますか？

昨年8月、スロベニアに行き、ヨーロッパの朗読フェスティバルに参加しました。ヨーロッパの詩人たちはものを書くより朗読なんですよ。5カ国ほどから集まった詩人たちに混じって朗読をさせていたんだんですけども、本当にたくさんのお客さんが朗読を聴きに來られる。ヨーロッパ中から人が集まって、千人ほどが普通の広場に集まるんですよ。明らかに詩が好きな人のほかに、近所のおじいちゃん、おばあちゃんもすごく楽しみにして、みんなワインを飲みながら朗読を聴いているわけですね。まるで近所の盆踊りのような雰囲気です。町中の人が集まってきています。

—どうしてこんなに朗読を大事にしているのかと僕が尋ねたんですね。そうしたら、スロベニアはいろんな国々に占領された。スロベニア語という言葉を剥奪されて、他の国の言葉を強要され、母語を奪われた。その時にどうしたかというのと、それでもスロベニア語を守ろうという人達が地下に入って、——まさしく地下組織ですね——詩を書いて朗読していたそうなんです



『詩の邂逅』

ね。占領が解かれて、その時にスロベニア語が復活したんですが、それは詩人たちの隠れた朗読による成果だったんですね。それで、「詩とワインの日々」というフェスティバルが開かれ、スロベニアの国歌は「さあ、詩を語ろう、酒を飲もう」という歌詞なんです。その時に、ああこれが声の力なんだなあ、朗読の力なんだなあ、そして大事なのは集まるってこと、声の周りに人々が集まれば何かを守るんですね。それをはつきりと感じたんです。もちろん言葉ありきなんです、言葉と同じくらいに声の力に足を運んで集まって詩を味わって、そして何かを守っていくんだ。だから僕はやっぱり言葉ありき、そして声ありきなんだなあ、と思っています。



トークライブ終了後、朗読パフォーマンスをする和合氏

「西日本は福島から遠く離れていますが、こちらには広島、長崎という被爆地があります。そこで「原爆文学」と称される文学が生み出されてきました。これは日本の文学のこれからの長い歴史を考えていくと、いま福島で起こっていることとどこかでつながっていくものだろうと思うのですけれども、和合さんは「原爆文学」を意識されることはありますか？

震災を経験するまでは、言葉というのが目の前にあって自分がある、と感じていたんですけれども、言葉というものがあってその先に、例えば原爆の光景だったり、水俣の不条理だったり、憤りだったり、戦争の悲惨さだったり、今もなお、それは世界中で起きているわけですよ、それを、言葉の前に広がる風景として読みたいと思うようになってきたんです。言葉というのはそれだけで私たちに何かを伝えてくれるものなんですけれども、言葉というものは橋になるんだな、って思ってたんですね。それをある方は「ことのはし」というふうにおっしゃっているんですけれども、つまり言葉の橋ですよ。ね。原爆詩が目のある。その言葉を橋として、原爆というものの悲惨さや間違いをきちんと受け止めてこなかったからこそ、50年後また爆発が起きたわけ

です。我々は受け止めきっていないまま、とにかく豊かに、とにかく先に先にといいうふうに生きてきたけど、いつのまにか私たちの手に負えない、原子力発電所というものが私たちの目の前にあって私たちを追い越していった。つまり、ものに追いつかなくなってしまった。それが今の私たちのおろかな現実だと思っんですね。それは、描かれてきたもの、例えば原爆の詩をきちんと私たちが受けとめていけば、そこから橋を渡って見えてきたものがあつたはずなんです。けどそれを私たちはしてこなかった。それが私たちの日本人としての間違いだったと私は思っています。

「文学」ではなく「原爆文学」と呼ばれるように、時間がたつとまわりからひとつのレッテルを貼られてしまうことが多いです。外からレッテルを貼ることで中身が見えなくなると、文学としての本当の意味合いが封じられてしまう。自分の内側に、自分の感性にレッテルを貼ってしまう危険もあります。今後福島から発信される文学を受けとめる時、私たちはそういう危険を意識しておかなくてはいけないというふうに思います。和合さんどうもありがとうございます。

## 和合亮一 Ryoichi WAGO

昭和43年福島市生まれ。国語教師。「歷程」同人、「六本木詩人会」主宰。平成11年、第1詩集『AFTER』で第4回中原中也賞受賞。平成18年、第4詩集『地球頭脳詩篇』で第47回土井晩翠賞受賞。2011年3月の震災以降、地震・津波・原発事故の被害に見舞われた福島から、ツイッターにて「詩の礫」と題した連作を発表し続ける(アカウント@wago2828)。





「青い馬」創刊号

昭和6年5月1日、岩波書店

「青い馬」は、昭和6年5月から昭和7年3月にかけて岩波書店から全5冊が刊行された、創作とフランス文学の翻訳紹介を中心とした文芸雑誌です。

詩人・小説家・画家の本多信、芥川龍之介の甥で小説家の葛巻義敏とともに編集の中心メンバーであった坂口安吾は、創刊号に小説「ふるさとに寄する讃歌」、評論「ピエロ伝道者」などを発表し、以後、小説「風博士」「黒谷村」、評論「FARCEに就て」など初期の代表作を続けて発表しました。安吾が新進作家として飛躍していく場ともなったのが「青い馬」でした。

中では昭和7年にウインザーという酒場で安吾と知り合い、昭和8年9月に創刊された雑誌「紀元」では同人仲間となりました。「青い馬」についても、昭和8年8月18日付の友人・安原喜弘宛の書簡において、ある出版記念会について「青い馬」の連中といふのも四五名来る筈ですから、出席されればよいと思ひます」と書いています。



「青い馬」創刊号表紙

詩話会編『震災詩集 災禍の上に』

大正12年11月20日、新潮社

48人の詩作品と、当時駐日フランス大使であったポール・クローデルの寄稿文により構成された詩集です。この詩集は、震災被害の速報的役割とともに、売り上げにより被災した詩人たちを援助する目的もありました。編集にあたった詩話会は、月刊誌「日本詩人」と年刊『日本詩集』を新潮社から刊行していた、当時最大の詩人団体です。

大正12年9月1日に起きた関東大震災は、文学界にも強い影響を与えました。作家・詩人たちは、実体験をもとに作品を発表し、それらは1、2カ月のうちにまとめられ、文集・詩集として出版されました。震災直後に発行された詩集としては、他に飯尾謙蔵編『噫東京』(大正12年11月16日、交蘭社)があります。

当館では関東大震災に関する資料(主に文芸関係)を収集しており、「改造」大震災号(大正12年10月1日、改造社)、「婦人画報」関東大火震災画報(大正12年10月1日、東京社)、「文章俱樂部」大正12年10月号改訂版(大正12年10月13日、新潮社)などを収蔵しています。



『震災詩集 災禍の上に』

開館20周年へ向けて

中原 豊

中原中也記念館の開館は1994(平成6)年2月18日、今年の開館記念日で19年目に入りました。来年2014(平成26)年に20周年の節目を迎えるにあたり、2月からスタートする様々な記念事業を企画し準備しているところです。

展示では、企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」(仮)でこれまでの記念館の歩みを紹介し、特別企画展「中原中也と日本の詩」(仮)で日本の近現代詩の大きな流れの中に中也という存在を位置づけてみたいと思います。また、山口情報芸術センター(YCAM)と連携して、中也をモチーフとしたインスタレーション作品を制作するという、新しい試みも行います。

また、中原中也の世界を手にとっていただけかたちで発信するために、記念館公式パンフレットや中学生向けの副読本を制作します。その他、20周年限定グッズをはじめとしてオリジナルグッズもさらに充実させる予定です。

こうしてこれまでの歴史を振り返りながら、今後の記念館があるべき姿を展望していきたいと考えています。

その他、詩人・和合亮一さんを中心とするワークショップや、中也の詩の英訳をテーマにしたパネルディスカッションなど、さまざまなイベントを予定しておりますので、どうぞご期待ください。

なお、施設・設備の改修工事を行うため、2013(平成25)年11月1日から2014(平成26)年2月15日までの三カ月半の間、休館させていただきます。しばらく展示を通じて中也の世界をお目にかけることができなくなりますが、より充実した環境で20周年を迎えるために、ご理解をいただきますようお願いいたします。

# 中也のうた

第10回 常設テーマ展示

2013年2月21日(木)～8月25日(日)



中原中也は自らの詩集を『山羊の歌』『里し日の歌』と名付けたように、『うた』を強く意識した詩人でした。中也の詩には、たくさんの『うた(歌、唄)』という言葉があらわれます。

中也は音楽を愛し、様々なジャンルの『うた』を敏感に受け止め、作品へと昇華させました。中也の詩の持つ口ずさみややさや独特のリズムは、中也が詩を『うた』としてかたちづくるうとした証であるともいえます。本展では、中也と音楽との関わりを紹介しながら、中也が追い求めた『うた』とは何かを探りました。

## 展示1 中也と『うた』

中也が生きた明治末期から昭和初期には、唱歌、童謡、流行歌、民謡といった多様な音楽が、時代を反映しながら発展しました。

中也の詩「六月の雨」「女給達」には、唱歌や当時流行していた映画小唄(映画主題歌のフレーズがそのまま取り入れられ、中也が親しんできた同時代の音楽や、映画の影響をうかがうことができます。また、中也は大正期に興った童謡運動や新民謡運動に関する書籍を読み、「童謡」「小唄」と題する詩や、民謡調の詩を創作しています。

展示1では、当時の音楽をたどりながら、その影響がみられる中也の詩を紹介しました。

《主な展示資料》中也草稿「童謡」「小唄二篇」「カフェーにて」、レコード「女給の唄」、「教科適用幼年唱歌」二編下巻

## 展示2 詩に流れる『うた』

「これが私の故里だ」(帰郷)、「思へば遠く来たもんだ」(頑足ない歌)など、中也の詩のフレーズには、口ずさみややすく、記憶に留まりやすいものが少なくありません。その秘密は中也の詩が持つ音楽性にあると考えられます。

中也の詩によくあらわれるリフレインは音楽でよく使われる手法です。また、七五調を基調とした詩も多く、声に出して読みやすいリズムを持っています。

展示2では、3篇の詩「サーカス」「汚れつちまつた悲しみに……」「雪が降つてゐる……」を取り上げ、音楽と共通する要素に注目しながら、作品を読み解きました。

《主な展示資料》『山羊の歌』校正刷り「汚れつちまつた悲しみに……」、「中也草稿「雪が降つてゐる……」



展示2



### 展示3 「うた」にのせて

昭和2年12月、諸井三郎、内海誓一郎らを中心メンバーとする音楽団体「スルヤ」が活動を始めます。その頃、河上徹太郎を紹介して諸井と親しくなった中也も、積極的にその活動に参加しました。

昭和3年5月、中也の詩「臨終」「朝の歌」が諸井の作曲により歌曲となり、「スルヤ」第2回発表演奏会で演奏されます。「スルヤ」第2輯に歌詞として掲載されたこの2篇は、中也にとって活字として世に出た最初の詩作品となりました。

展示3では、中也が詩人としての出発期に出会った「スルヤ」との関わりと、歌曲や合唱曲となり、「うた」として今なお生き続ける中也の詩を紹介しました。

《主な展示資料》中也草稿「朝の歌」「消えし希望」「スルヤ」第2輯、ポスター「スルヤ第一回演奏会」、レコード「中原中也の世界」

### 展示4 「うた」への思い

中也は詩のほかに50篇の評論を残しています。その多くが詩や音楽などについての芸術論です。

詩を語るなかでしばしば使われるのが、「歌」という言葉です。中也にとって詩作とは、技巧によって言葉を操ることではなく、「生命の叫びを歌ふ」（生と歌）ことにほかなりませんでした。その叫びこそが「うた」であつたといえます。

自らの内にある「うた」に耳を澄まし、

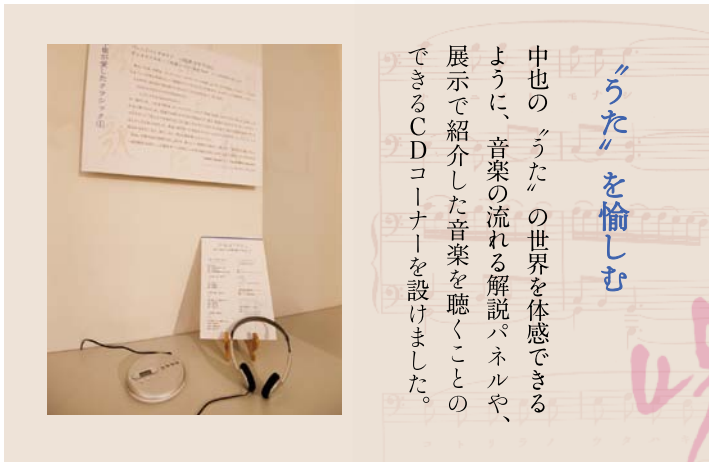
言葉に置き換える困難に葛藤しながらも、多くの詩を紡いだ中也。その思いは「私の歌を聴いてくれ」（処女詩集序）という言葉に込められています。

展示4では、「うた」について書かれた詩・評論作品を紹介し、中也が追い求めた「うた」とは何かを探りました。

《主な展示資料》詩集「山羊の歌」「在りし日の歌」、中也草稿「処女詩集序」「小詩論」、中也日記（新文芸日記）、「スルヤ」第3輯、中也使用と同型の蓄音機

### 「うた」を愉しむ

中也の「うた」の世界を体感できるように、音楽の流れる解説パネルや、展示で紹介した音楽を聴くことのできるCDコーナーを設けました。



展示4

特別企画展

# 中原中也 の手紙

## —安原喜弘との交友

2012年8月30日(木)～10月29日(月)



102  
Letters from Chuya Nakahara  
to Yoshikiro Yasuhara.



中原中也はたいへん筆まめで、知人に多くの手紙を書き送っていました。現存する手紙の中で最も数が多いのが友人・安原喜弘宛の102通(封筒のものを除く)です。  
安原は、昭和3年成城高校在学中に中也と出会いました。以後、「白痴群」同人となり、第一詩集『山羊の歌』の出版を助けるなどして、中也を支え続けました。中也の没後には、100通の手紙と自身に送られた詩を年代順に収録し、その折々の交流を綴った『中原中也の手紙』を刊行しました。この著書は版を替えながら現在に至るまで永く読み継がれています。  
本展では、安原喜弘の「息子息である喜秀氏を監修にお迎えして、『中原中也の手紙』の内容を中心に、102通の手紙を会期を三つに分けてすべて展示したほか、調査によって新たに発見された安原関係の資料を通じて、両者の類いまれな交流の軌跡を紹介しました。

### 展示1

出会い  
—〈仮借なき非情の風貌〉

昭和3年、中也と出会った頃の安原は成城高校の生徒であり、同校には後に同人誌「白痴群」に集うことになる富永次郎、古谷綱武、大岡昇平らが在籍していました。中也と安原の出会いと、その背景にあった音楽集団「スルヤ」の活動、成城高校における文芸や演劇などの活動について紹介しました。

《主な展示資料》『中原中也の手紙』、中也自筆草稿(朝の歌)、安原喜弘自筆草稿(想出島之春)、「スルヤ」、成城高校関係資料(同人誌「遊歩場」、「遊歩場週報」、校友会誌「城」、演劇公演チラシ)、「野村良雄日記」、安原喜弘スケッチブック



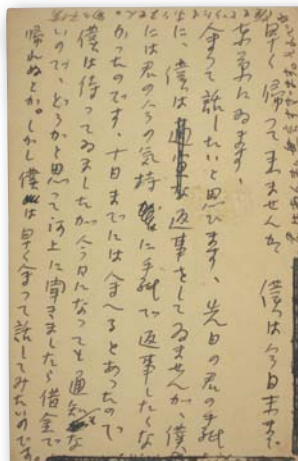
「遊歩場」第2号表紙



安原喜弘「中原中也の手紙」

### 展示2

「白痴群」という場  
—〈語り尽くし得ぬ〉もの



安原喜弘宛  
中原中也書簡  
昭和6年7月14日

昭和4年4月に「白痴群」が創刊されましたが、編集の場のひとつとなつたのが東京・目黒の安原の自宅でした。安原は進学のため京都に転じますが、第2号に発表された安原の詩がきっかけとなり、両者はさらに親しくなります。「白痴群」廃刊後の詩作が減った時期にも、中也は後の詩集『山羊の歌』で重要な位置を占めることになる「羊の歌」を安原に贈りました。昭和7年3月、安原を故郷山口に迎えた際には、中也は「語り尽くし得ぬ」(「中原中也の手紙」)ものを語りうとします。同時期の両者の交流の深まりを手紙や詩を通じてご紹介しました。

《主な展示資料》安原喜弘宛中也書簡(昭和7年3月まで)、中也自筆草稿(羊の歌)「薔薇」「秋の日曜日」他、安原喜弘自筆草稿(午后勤四時)、安原喜弘書簡下書き、「白痴群」およびその関連資料





展示3 『山羊の歌』出版まで  
—『魂の動乱』に寄り添う

京都帝国大学を卒業後東京に戻った安原は、美術評論の執筆にあたる一方で、「女性日本」「紀元」といった雑誌に小説を発表していました。しかし、高校時代以来の創作への意欲は『魂の動乱』（『中原中也の手紙』の時期に入った中也を支える中で次第に衰えていきます。編集から出版まで難航を極めた詩集『山羊の歌』成立に果たした安原の役割と、同時期の両者の活動と交流を紹介しました。

《主な展示資料》安原喜弘宛中也書簡（昭和9年まで）、安原喜弘書簡下書き、安原喜弘自筆草稿（『山羊の歌』広告文案）、「汚い目」「ミスタQ」他、『ランボオ詩集』『学校時代の詩』、『山羊の歌』（安原喜弘宛献呈署名入り）、『山羊の歌』校正刷、雑誌「女性日本」、雑誌「紀元」、「ゴッホ」、「セザンヌ」、「児童百科大辞典」

展示4 詩人との訣れ  
—『中原中也の手紙』

『山羊の歌』出版後、両者の間には距離が生まれ、中也の手紙には安原に批判的な内容が現れるようになります。昭和12年10月、生前最後の手紙を安原に残して中也は世を去りました。その3年後に起稿された『中原中也の手紙』は戦後ようやく出版に至ります。それは中也の貴重な伝記資料であると同時に、安原自身の中也との壮絶な魂の交流の記録でもありました。その後も第一次中原中也全集の出版に尽力するなど、中也の紹介につとめた安原の戦後の活動も併せて紹介しました。

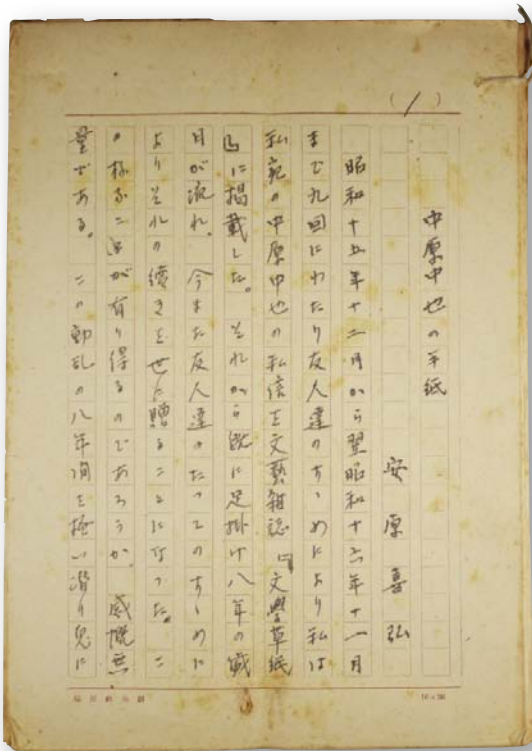
《主な展示資料》安原喜弘宛中也書簡（昭和12年10月まで）、安原喜弘自筆草稿（『中原中也の手紙』詩人との出会い—中原中也のこと他）、『ランボオ詩抄』、『ランボオ詩集』（安原喜弘宛献呈署名入り）、雑誌「文学草紙」

※お知らせ

本展に新たな資料を加えて再構成した巡回展が開催されます。

『中原中也の手紙』展—安原喜弘へ

会期 2013年6月15日（土）～8月4日（日）  
会場 県立神奈川近代文学館  
〒231-0862 横浜市中区山手町1-1-0  
☎045-622-6666



安原喜弘「中原中也の手紙」草稿



安原喜弘宛中也書簡 昭和12年9月2日

# 高橋新吉

## — ダダイズムと関東大震災

2012年4月18日(水)～8月26日(日)



大正12年9月1日、関東地方および周辺を襲った「関東大震災」は、芸術の分野にも大きな影響を及ぼしました。ダダイズム<sup>①</sup>や表現派といった前衛芸術が新たな展開を示し、東京在住の人々が疎開したことが、東京に集中していた文物を各地に分散させることにつながりました。

同じ年の秋の暮、立命館中学の3年生として京都に住んでいた16歳の中也は、古本屋で高橋新吉の詩集『ダダイスト新吉の詩』を目にします。中也はこの詩集に強く心惹かれ、早速自分でも、新吉をまねた詩を書き始めます。中也が大正12年にダダイズムと出会い、その影響下で詩を書き始めたことは、関東大震災がつくりだした時代の変化と深く関わっているように思われます。

本展では、中也・新吉・ダダイズムの結節点である関東大震災前後の時期を中心に、三者の関わりとそれぞれの展開を紹介しました。

※ダダイズム：1916年、第一次世界大戦の最中にスイスで始まった反芸術運動で、「無意味」を合い言葉に、それまでの詩・絵画・音楽などが有していた決まり事を壊し尽くそうとした。ニューヨーク、パリなど世界中に波及し、各地の文化に大きな影響を与えた。

### 展示1 ダダイスト新吉

高橋新吉は明治34年に愛媛県で生まれ、大正9年に新聞記事でダダイズムを知り、強烈な衝撃を受け、以後ダダイストとしての活動を始めます。大正12年2月、辻潤の編集による『ダダイスト新吉の詩』が出版され、大きな反響を呼びました。展示1では、新吉の出生から『ダダイスト新吉の詩』が世に出るまでについて紹介しました。

### 展示2 関東大震災とダダ

関東大震災後、現地速報的な役割も兼ねて、多くの雑誌が競うように震災特集号を組みました。また、文集や詩集も発行され、読者に震災の惨劇と文学者たちの思いを伝えました。そして、ダダイズムなどの前衛芸術の分野では震災後、身体感覚に訴える、より過激な表現が多く見られるようになります。展示2では、関東大震災による表現の変容について、震災前後に発行された詩集や、震災後に発行された前衛的表現の雑誌などにより紹介しました。

### 展示3 新吉と中也

— 関東大震災から二人の対面まで

関東大震災発生時、新吉は愛媛に、中也は京都にいたため、被害を受けることはありませんでした。しかし、その影響は二人にも及んでいます。大正13年、新吉は小説『ダダ』出版を機にダダイズムから離れますが、新吉の作品は前衛的表現の先駆として高く評価されるようになります。大正12年、『ダダイスト新吉の詩』に感激した中也は、早速自分でも新吉の表現をまねた詩を書き始め、ダダイストを自称。友人やその家族からは「ダダさん」というあだ名で呼ばれました。震災後の時代の変化の中で、中也はダダイズムを通じて、自分と向き合い、周囲との関係を見いだしていったのです。展示3では、中也が『ダダイスト新吉の詩』を知ってから、二人が実際に会うまでの時期を中心とした、新吉と中也の関係と、中也の詩における新吉作品の影響について紹介しました。

《主な展示資料》高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』(祇園祭り『ダダ』、高橋新吉草稿「倭人辻潤」、<sup>②</sup>「噫東京」、<sup>③</sup>震災詩集「災禍の上に」、<sup>④</sup>「関東大震災記」、<sup>⑤</sup>「中央美術」大正11年12月号、「婦人画報」関東大震災火災画報「文章倶楽部」大正12年10月号改訂版、「<sup>⑥</sup>売恥醜文」創刊号





# 中也の父・謙助

2012年11月1日(木)～2013年3月24日(日)

中也の父・中原謙助は、苦学の末に医師免許を取得し、軍医となった人物です。のちに中原家の婿養子として中原医院を継ぎ、山口・湯田では評判の医者でした。ドイツへの医学留学を目指すほどの勉強家でありながら、短歌や小説を愛好する一面も持っていました。

また、軍医学校時代の校長であった森鷗外を尊敬し、交流もありました。しかし、中也が文学の道に進むことには反対し、息子の文学的業績を見届けぬまま亡くなります。そんな父親の姿を、中也の詩や小説のなかに様々な形で見いだすことができます。

本展では、謙助の生涯と、中也の作品に見られる父親像を紹介しました。

## 展示1 軍医としての謙助

謙助は、明治9年、現在の山口県宇部市厚東（とくとう）に生まれました。小学校を卒業後に、わずか13歳で上京し、医者（いしや）の書生（しやうせい）となります。済生学舎（さいせいがくしゃ）（日本医科大学の前身）で医師免許を取得後、陸軍軍医学校を経て軍医となります。

展示1では、謙助の誕生から、軍医となり、中原フクと結婚するまでを紹介しました。

あわせて、陸軍軍医学校時代の校長であった森鷗外についても取り上げました。

## 展示2 父として、医師として

明治40年、待望の長男・中也が湯田の中原家で誕生します。当時、旅順（りょん）（現在の中国大連市）に単身赴任していた謙助は、フクに手紙を出し、中也を連れてくるようにと何度も催促します。生後半年の中也は、フクに連れられ、旅順の謙助の元へと向かいました。

大正6年、謙助は軍医を退き、中原医院を継ぎます。医院は大繁盛し、開業医として多忙な日々を送る一方、中也を熱心に教育します。その甲斐あつてか、小学校時代の中也は成績優秀でした。しかし、中也は次第に文学に目覚め、勉学が疎かになってしまします。ついに山口中学校を三年生で落第、京都の立命館中学校に転入します。一方、謙助は井上公園の七卿碑建立に奔走しますが、完成を見届けた後、体調を崩し、病床につきます。当時東京にいた中也は、たびたび山口へ帰省し、父を見舞いました。しかし、謙助は快復することなく、昭和3

年に51歳でこの世を去りました。

展示2では、長男・中也の誕生から、中原医院を継ぎ、亡くなるまでの謙助の半生を紹介しました。

## 展示3 中也作品にみる父親像

謙助の死後も中也は東京にとどまり、昭和9年には念願の第一詩集『山羊の歌』を出版、詩人としての活躍の場を広げていきます。医者となり謙助の跡を継ぐことはありませんでしたが、中也にとって父親の存在は大きく、作品の中にさまざまな形で表現されています。

展示3では、中也の詩や小説に描かれる父親像について紹介しました。また、普段はあまり触れられることのない中也の小説にも焦点を当て、「その頃の生活」と「医者」と赤ん坊」の直筆原稿を期間限定で特別展示しました。

《主な展示資料》謙助の軍帽、森鷗外草稿「舞姫」自記材料、中也草稿「一つの境涯」「少年時」「防長人物誌」、  
「生活者」昭和4年9月号、中原医院薬瓶



謙助の軍帽



## 中原中也記念館から 手紙を出そう



受付の向かい側、展示室の入り口あたりに、昭和の時代に活躍した赤いポストが立っています。もちろん模型なのですが、ちゃんと差し出し口があって、切手を貼ってはがきや手紙を投函すると、井上公園の「帰郷」詩碑がデザインされた湯田郵便局の風景印（消印）が押されて届けられます。

このポストは、もともと特別企画展「中原中也の手紙―安原喜弘との交友」のために制作されたものですが、実際に使用できることに着目し、「中原中也記念館から手紙を出す」という企画を考えました。湯田郵便局の協力を得て平成24年9月25日にスタートし、好評を受けて特別企画展終了後も続けています。半年の間に約150通のはがきや手紙が各地に届けられました。

ポストは今後も現役として活躍する予定です。記念館オリジナルのポストカードや、切手は受付で販売しています。みなさんどうぞご利用ください。

## 中原中也を読む会 100回記念 映画「眠れ蜜」を観る



当館では毎月第4金曜日に「中原中也を読む会」を開催しています。この会は、参加者のみなさんで詩を読んで感想を語り合ったり、記念館の展示を学芸担当職員の見学とともに見学したり、時には中也に関連する音楽を聴いたりしながら、詩の世界を楽しく味わおうという会です。

平成16年に始まった「読む会」ですが、多くの方に支えられ、平成24年9月28日に100回を迎えることができました。その記念として、山口情報芸術センター・スタジオAにて「映画『眠れ蜜』を観る」と題したイベントを行

いました。

映画「眠れ蜜」は3部構成で、それぞれ一人ずつ女優が登場し、自分自身を語るのですが、その自分とは現実の自分であり、「女優」を演じている自分でもあるという、現実とフィクションが巧妙に入り混じった作品です。

今回は、その美貌と個性で中原中也・小林秀雄らを魅了した女性・長谷川泰子が登場する第3部（約25分）を上映し、その後、映画について意見や感想を話し合いました。当日は約40名の方にご参加いただきましたが、映画の題名についての鋭い考察など、様々な意見や質問が出て、普段の「読む会」とはひと味違った、100回記念にふさわしい会となりました。

※監督・岩佐寿弥、脚本・佐々木幹郎、シネマ・ネサンス製作、昭和51年

## 「文学散歩」 中也・鷗外ふるさと巡り バスツアー

# 3

11月25日、企画展Ⅱ「中也の父・謙助」の関連イベントとして、「一般財団法人山口観光コンベンション協会主催、当館協力による「文学散歩」中也・鷗外ふるさと巡り」バスツアーが開催されました。このツアーは、中也の父・謙助が森鷗外と交流があったこと、2012年が鷗外生誕150周年であることちなみ、森鷗外記念館（津和野）のご協力も得

て実現しました。

最初に中原中也記念館で展示の解説を行ったあと、山口市阿東にある景勝地・長門峡へ向けて出発。移動するバスの中では、当館の職員が、中也や山口の文学者たちについてさまざまな角度からご説明しました。

長門峡では中也の「冬の長門峡」の詩碑を見学し、その後、津和野の森鷗外記念館へ。ここでは森鷗外記念館の学芸員の方に解説をしていただき、鷗外の生涯について学びました。昼食をはさんで、周辺にある鷗外生家や西周旧宅などの旧跡を散策した後、次は萩市へ向かい、中原家が一時期転居していたという場所を訪れました。当時の建物は残っていませんが、中也が愛した静かな雰囲気を感じました。その後は自由時間を取り、それぞれに萩の町を散策していただきました。

参加者の方からは、「いろいろ説明があつて面白かった」「時間が足りないほどだった」といった声が寄せられました。



写真提供：（一財）山口観光コンベンション協会



4月1日	特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続) 東北を中心とした文学館の紹介、草野心平・尾形亀之助の詩を展示	10月22日	中也命日、お墓参り
18日	企画展Ⅰ「高橋新吉—ダダイズムと関東大震災」(~8月26日)	26日	第101回 中也を読む会 特別企画展「中原中也の手紙—安原喜弘との交友」見学
	特別展示:第17回中原中也賞 暁方ミセイ『ウイルスちゃん』(~5月6日)	11月1日	企画展Ⅱ「中也の父・謙助」(~平成25年3月24日)
27日	第95回 中也を読む会 企画展Ⅰ「高橋新吉—ダダイズムと関東大震災」見学	21日	第2回 運営協議会
29日	生誕祭「空の下の朗読会」(記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者20名) 李政美コンサート	23日	第102回 中也を読む会 企画展Ⅱ「中也の父・謙助」見学
	第17回中原中也賞贈呈式 (ホテル松政) 受賞詩集:暁方ミセイ『ウイルスちゃん』(思潮社) 記念講演「中也がガンであったなら」 講師:村田喜代子 主催:山口市	25日	文学散歩~中也・鷗外ふるさと巡り~バスツアー 企画展Ⅱ「中也の父・謙助」関連イベント 主催:(一財)山口観光コンベンション協会
30日	第1回 運営協議会	12月28日	第103回 中也を読む会 中也が聴いた音楽
5月25日	第96回 中也を読む会 屋外展示「祈りの詩」を読む1—「妹よ」「聞こえぬ悲鳴」	1月19日	第2回公開講演・詩の朗読会 (山口情報芸術センター) 「和合亮トークライブ」ことばを通して福島と向き合う」
6月22日	第97回 中也を読む会 第17回中原中也賞—暁方ミセイ『ウイルスちゃん』を読む	25日	第104回 中也を読む会 太宰治の小説と中也の詩を読む
7月27日	第98回 中也を読む会 中也の翻訳詩を読む—『ランボオ詩集』より	2月18日	開館19周年
8月24日	第99回 中也を読む会 磯永秀雄の詩を読む	21日	第10回常設テーマ展示「中也のうた」(~8月25日)
30日	特別企画展「中原中也の手紙—安原喜弘との交友」(~10月29日) オープニングセレモニー開催	22日	第105回 中也を読む会 常設テーマ展示「中也のうた」見学
31日	機関誌「中原中也研究」第17号発行	3月1日	特別展示:「東日本大震災と詩」 全国文学館協議会加盟館との共同展「文学と天災地変」への参加企画(~3月24日)
9月2日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説	2日	山口お宝展(~4月7日) 中也直筆原稿の特別展示 主催:山口商工会議所
15日	第1回公開講演 (ホテルニュータナカ) 「中也のリズム感」 講師:池内紀 共催:中原中也の会	22日	第106回 中也を読む会 屋外展示「祈りの詩」を読む2—「生ひ立ちの歌」「我が祈り」
28日	第100回 中也を読む会 《100回記念》映画「眠れ蜜」(長谷川泰子出演場面)を観る	27日	平成25年度企画展 「旅する中也—汽車の笛聞こえもくれば」(~8月25日)
30日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説	31日	館報第18号発行
10月7日	SPレコードコンサート 中也、安原喜弘が聴いた名曲の数々をSPレコードと蓄音機で聴く 講師:石川秀		 山口お宝展
21日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説		 特別展示:「東日本大震災と詩」

## 中原中也の会

5月19日	第16回中原中也の会研究集会「富永太郎と中原中也」 (県立神奈川近代文学館) 総合司会:阿毛久芳 講演「富永太郎の位置—小林秀雄と中原中也を定点として—」 講師:宇佐美斉 シンポジウム「富永太郎と中原中也、ふたつの可能性」 パネリスト:青木健、権田浩美 司会:疋田雅昭 後援:県立神奈川近代文学館		シンポジウム「中原中也の手紙—その友情の軌跡」 パネリスト:福島泰樹、中原豊 司会:加藤邦彦
7月31日	会報第32号発行	16日	中原中也の会第13回セミナー (ホテルニュータナカ・中原中也記念館) 公開対談「安原喜弘という人—新発見資料から」 講師:安原喜秀 聞き手:中原豊 特別企画展「中原中也の手紙—安原喜弘との交友」見学 解説:中原豊
9月15日	中原中也の会第17回大会「中原中也の手紙」(ホテルニュータナカ) 総合司会:二木晴美 講演「中也のリズム感」 講師:池内紀 朗読「耳で味わう“聴き木林”」 朗読:林木林	12月	会員名簿発行
		25日	会報第33号発行

◎第18回中原中也賞

『谷間の百合』



ほそだ ぜんごう  
細田傳造氏

Chuya  
Nakahara  
prize  
18th



**第** 18回の中原中也賞は、公募および推薦による176詩集の中から、細田傳造氏の『谷間の百合』(書肆山田)が選ばれました。

細田氏は昭和18年生まれの69歳(受賞時)。今回の最終選考に残った7詩集のうち、5冊が男性詩人によって占められました。20代、30代の若い詩人の作品よりもなお、言葉の持つ〈現代の意識〉〈読者の心をとらえる生々しい魅力〉〈初々しさ〉(選評)よりが際立っているとの全会一致の評を受け、歴代受賞者最高齢での受賞となりました。

受賞作『谷間の百合』は、平成20年頃から詩作を始めた細田氏の第一詩集です。5歳の孫との対話や、自身のルーツである韓国語を織り込んで綴られた34篇の詩には、世代や国の境界を軽やかに行き来する細田氏の柔らかな感性があふれています。

きょう幼稚園でちぎれてしまった

しおりせんせいにおこられてちぎってしまった

くらい顔して帰ってきた

かなしいのか

のぞきこむわたしに

かけるは凍った

かなしいってなに？

凍った顔が訊いている

答えられないわたしが凍った

わたしたちの川の水が凍った

わたしたちの池が凍った

かなしいなんて言葉を使うのではなかった

じいジャスコへゆこう

キッズランドへゆこう

わたしたちの川の水が流れた

もうかなしいなんて仮定法未来完了形は使わない

(「目が枯れて」より)

この詩集、一見老人の日常がうたわれているように見えながら、深い生と死の亀裂が注視されていたり、韓国と日本の切斷の意識が、ざらざらとしたつぶてのようなことばの感覚でとらえられていたり、日常的な風景から非日常や深い思考にジャンプしたり、エロスの怖れにやわらかく触れられたり、年齢を超えて、若々しいことばの世界が創造されていた。(選評より)

◎平成25年度 記念館事業・関連行事予定

2013年4月—2014年3月

3月27日	企画展 「旅する中也—汽車の笛聞こえもくれば」 (～8月25日)	8月29日	特別企画展 「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」(～10月31日)	11月1日	改修工事のため休館 (～平成26年2月15日)
4月29日	生誕祭 空の下の朗読会 (会場:中原中也記念館前庭)〈無料開館日〉	9月14日	中原中也の会第18回大会 (会場:ホテルニュータナカ)	平成26年 2月16日	第11回常設テーマ展示 「恋愛詩」(仮)(～平成27年2月下旬)
5月5日	こどもの日〈無料開館日〉	9月15日	中原中也の会第14回セミナー (会場:ホテルニュータナカ・中原中也記念館)		平成26年度 企画展I 「中原中也記念館の20年」(仮) (～8月31日) 〈無料開館日〉(～2月18日)
6月1日 ・2日	中原中也の会第17回研究集会 (会場:日南市中央公民館ほか)	10月22日	中也命日・お墓参り	2月18日	開館20周年 ※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第18号】平成25年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物油インキを使用しています。